

「文法化」とロシア語学

小林 潔

#はじめに

近年、「文法化」¹が注目されている。日本では2004年に『月刊言語』で特集「文法化とはなにか 言語変化の謎を解く」が生まれ、大堀壽夫・金水敏・寺澤盾・野村剛史・木村英樹・クリスティン＝ラマールの諸氏が記事を書いているし²、日本語学会『日本語の研究』といった個別言語プロパーの学術誌でも2005年に特集「日本語における文法化・機能語化」が掲載されている³。また、基本書である Hopper/ Traugott の「Grammaticalization」(1993)も日野資成により邦訳が刊行されている⁴。

ロシアの学界においても、また、ロシア語学においてもこの理論への関心は高い。そこで、本稿では、

- 1) 文法化理論の概略とロシアでの理解に触れた上で、
- 2) 現在のロシアの文法化研究の一例として若手研究者マイサク (Майсак Т.А. 1975-) の業績 [Майсак 2000] を取り上げ、
- 3) ロシア語を題材とした論文 [Kuteva, Heine, 2004] を紹介し、
- 4) ロシア語学およびロシア語教育への文法化理論の寄与を指摘したい。但し、本稿は、ロシアおよびロシア語学界での文法化研究の全体像を提示するものではない。あくまでも一事例を紹介するに過ぎない。マイサクの近著 [Майсак 2006] についても後日の、然るべき研究者の

¹英語：Grammaticalization; Grammaticalisation. 露語：грамматикализация. なお、本稿では以下、「」は外して記述。また、現象とそれに着目する考察を特に区別しない。筆者による注は〔〕で示す

² 第33巻第4号。

³ 第1巻第3号 / 『国語学』222号。

⁴ 『文法化』九州大学出版会、2003年。

手によるレビューを待ちたい。

文法化とは

メイエの指摘に始まる文法化への関心はロシアにおいてもかねてより存在した。ロシア語学に関する術語解説事典である「Русский язык. Энциклопедия [ロシア語百科]」(1979)では、ロパーチン(Лопатин В.В. 1935-)が筆を執り、以下のように定義している。1997年の改訂第2版でも同様の記述である。

文法化とは、自立語が付属語的機能で用いられた結果、語彙的自立性を喪失することである。ロシア語での文法化の例としては以下のようなものがある。

・動詞 *быть* (語彙的意味としては、ある場所に「存在」する)の諸形態が、動詞定形のない文中でコピュラとして用いられること(Он был учителем [彼は教師だった 男性過去単数形]); Будь здоров! [ご自愛! 二人称単数命令形])。また、未来形の分析的形態を形成する際に助動詞の役割で用いられること(буду читать [私は読む 一人称単数未来形])

・ある語形が接辞化すること(例えば、動詞 *идти* [行く]の分詞の古い形態である *шьды-* が、дважды, трижды [二度、三度]といったタイプの副詞の接尾辞 *-жды* となった)。

・自立語もしくは語結合が、前置詞、接続詞、助詞といった付属語となること(前置詞としては согласно +与格[~に従って], вследствие +属格[生格][~の結果]; 接続詞としては значит [つまり], будто [あたかも](будь то から); 助詞としては пускай, давай, бы [~せしめよ、~しよう、仮定法助詞 いずれも動詞諸形態から] бы の起源は動詞 *быть* のアオリスト形)。

文献としては

Виноградов В.В., Русский язык. (Грамматическое учение о слове), М.-Л., 1947; 3 изд., М., 1986 [ヴィノグラードフ 『ロシア語(語の文法的研究)』];

Черкасова Е.Т., Переход полнозначных слов в предлоги, М., 1967 [チエルカソワ 『自立語から前置詞への変化』];

её же, Русские союзы неместоименного происхождения. Пути и способы их образования, М., 1973 [同 『ロシア語の非代名詞起源接続詞 形成の過程と方策』] [Лопатин 1979: 61]

ここでロシア語学の基礎文献であるヴィノグラードフの著作が言及されていることは示唆的である。文法化という現象はロシアの学界において十分に認知されていた、と言えるのだ。

ちなみに、ネット百科事典『ウィキペディア』ロシア語版でも英語版やドイツ語版に比べれば貧弱なもの項目がたてられており、以下のような解説がなされている。

文法化とは、言語の変遷とともに語彙単位が文法指標に変わることである(例えば、自立語である動詞 *стать* [立つ]が、*стану работать* [私は働きはじめる]という構文で未来における動作の開始を意味している)。

「文法化」という用語は 1912 年にメイエが用いたものである。文法化現象の研究が活発となったのは 1980 年代からである。主な研究に B.Heine, Ch.Lehmann, J.Bybee のものがある⁵。

例を変えつつロパーチンと同様の定義をより簡潔に述べている。また、現在のロシア外の文法化研究にも言及されている。

これらの定義により、文法化はロシアの学界でも以前から認知されており、しかし、現代の研究はロシア以外の学統も受け容れつつ、その関心を世界の学界と共有していることが分かる(これは後述の [Майсак 2000] でも同様である)。

もっとも、文法化には、「自立的な品詞・形態を持つ語が付屬的な品詞・形態を持つ語へと変化していく統語論的・形態論的側面と、語の具体的な意味が抽象的な意味へと変化していく意味論・語用論的な側面が

⁵ <http://ru.wikipedia.org> 筆者匿名、2006年5月6日現在の記事。

ある」[金水 2004:34] のであって、上記2つの定義では前者の側面しか触れられていない。

文法化に関して諸家によりその基準が提案されている。[大堀 2005]によれば、それは以下の通り。これは、Comrie, Lehmann, Hopper に基づいたものである。

- 基準 1: 意味の抽象性 (具体的から抽象的へ)
- 基準 2: 範列の成立 (開いたクラスから閉じたクラスへ)
- 基準 3: 表示の義務性 (随意的から義務的へ)
- 基準 4: 形態素の拘束性 (自由形式から拘束形式へ)
- 基準 5: 文法内での相互作用 (無しから有りへ) [大堀 2005:4-5]⁶

これらの度合いが高いほど文法化が進んでいるわけである。そして変化の兆候として Hopper が挙げる層状化・分岐・特化・保存・脱カテゴリー化の5つがある [以上 Ibid.:4-5]。さらに文法化の単方向性 (unidirectionality) が重要概念として紹介されている [Ibid.:13]。

ロシアにおける文法化研究の一例 マイサクの研究

マイサク [Майсак, Тимур Анатольевич] はロシア科学アカデミー言語学研究所の研究者である。モスクワ大学理論・応用言語学科出身、2002年には、キブリクとプルンギャン [А.Е. Кибрик, В.А. Плунгян] の指導のもとでカンディダート号を取得した。近著に『移動動詞・位置動詞構文の文法化類型論』 [Майсак 2006] がある。

ここに紹介する «Вопросы языкознания [言語学の諸問題] » 誌掲載論文「移動動詞の文法化：類型論試論」 [Майсак 2000] は前掲の大著のもととなったものである。

マイサクは、文法化を「語彙単位 [лексической единица] が文法指標へと変わること」と捉え、Lehmann, Heine, Reh, Hopper, Traugott, Bybee, Dahl および Н.Р. Сумбатова, Плунгян の研究に依拠することが表明さ

⁶ () 内は同所により筆者が補った。

れている [以上 Майсак 2000:11]。これは上記の [大堀 2005] が述べる
ところと同じである。

そして、一定の語彙単位が文法化されやすいという認識のもと、そう
した単位として移動動詞を取り上げる。その上で、文法化の発達経路を
考察するのだが、約 100 弱の言語が考察対象とされる。印欧諸語、チュ
ルク諸語、ドラヴィダ諸語、東南アジア諸語、シナ・チベット諸語、オ
ーストロネシア諸語、アフリカ諸語である [以上 Майсак 2000:13]。

こうした対象から導き出されるのは以下の「内的な法則」である。

- (1)言語 L に何らかの移動動詞の文法化が生じている場合、それらの
動詞の中には「行く」「来る」の両方もしくはどちらかがある
〔идти/уходить и/или приходитъ 強調原文〕。
- (2)ある文法単位の文法化が頻繁になるほど、文法化の発達経路の数は
増加するのが常である。
- (3)「来る」という動詞を持つ構文は文法化の結果、かなりの程度(お
よそ 33%)「未完了の」アスペクト領域のなかの意味(漸次・継続・
習慣)を得る。同様に、プロスペクティブ〔prospektiv〕/未来時制と
いった意味や コムプレティヴ〔kompletiv〕という意味も得る(それ
ぞれおよそ 17.5%)。よりまれではあるが、近時(過去)や可能性、
相対的な帰結の表現にもなるし、受動構文で用いられることもある。
- (4)動詞「行く」(この動詞を有する構文)の文法化で最もよくある発
達経路は、継続・習慣の意味の両方もしくはどちらかを獲得すること
である。
- (5)動詞「入る 〔входить〕」(この動詞を有する構文)の文法化で最もよ
くある発達経路は、動詞修飾詞としては入始〔inchoativ〕の意味の獲
得であり、名詞としてはインラティヴ〔inlativ〕(「中に」)という意味
を得ることである。[Ibid. :15]

文法化の主要な発達経路が具体的に検討されているが、それはいわゆ
る“TMA categories (Tense-Mood-Aspect categories)”という時制・法・ア
スペクトのカテゴリーであり、また空間のカテゴリー、共演成分の派
生・ヴォイスと関わるカテゴリー、クラス・数・人称の一致カテゴリー

についてである [以上 Ibid.:16-24]。また、ソースとなる語彙単位と総括的な意味〔итоговое значение〕との関係についても以下のように言及されている。

- 1) 文法化のソースとなる一つの単位が、いくつかの総括的な意味と関わっている場合がある。
- 2) 文法化のソースとなる2つの異なる単位が、結果として、全く同じではないにしても似た意味を提示することがある。
- 3) 一つの移動動詞が、一つの言語の中でいくつかの文法化の発達経路を通ることがある。[Ibid.:25-26]

この上で、文法化の経路の類型論的一覧表を提示しているわけだが [Ibid.: 28-29]、そこで問題となるのが、「具体的な語彙単位の発展の可能なタイプの記述」であり、「いくつかの具体的な意味がどのように生じるか説明」することである。文法化の全ての発達経路が「動機づけされたものだ」と考えているわけである [以上 Ibid.:26-27]。

ロシア語を題材とした研究 [Kuteva, Heine, 2004]

ロシア語を題材とした研究も見られるようになってきている。一例として Tania Kuteva, Bernd Heine 「北ロシア語における所有完了構文 "On the possessive perfect in North Russian"」 [Kuteva, Heine, 2004] を紹介する。両氏は文法化研究の第一人者である⁷

北ロシア語すなわちロシア語北方方言は、地理的な状況に起因して古くからゲルマン語、フィン・ウゴル諸語と接触してきた。著者たち自身の概要によればこの研究は以下の通り。

シャフラノフの「統語関係におけるロシア語の体」 [Шафранов С. О

⁷彼らの "World Lexicon of Grammaticalization" (Cambridge UP, 2002) についてのマイサクによる露語書評を筆者は本誌第8号で紹介した。また、ハイネ氏の "Cognitive Foundations of Grammar" (Oxford UP, 1998) は早稲田言語研究会有志により『言語はなぜ今の姿をしているのか 文法の認知的基礎』という題で翻訳出版を企画中。

видах русских глаголов в синтаксическом отношении.—М., 1852.—С.10-11]の著作ではじめて注目されたと思われるが、北ロシア語の構文 u "at" + 名詞(属格(生格))+分詞(形動詞)語尾 -no/-to、例えば、U menja v dome ubrano/ У меня в доме убрано (At-me-in-home-tidied-up; "I have tidied up at home" [私は家をきれいにした])が、ドイツ語の所有完了 "Ich habe im Hause alles in schöne Ordnung gebracht" に完全に対応するという事実がある。

本論文が示そうとするのは、北ロシア語の所有完了が「信頼できる文証」として確認できるのは19世紀という遅くであるにしても、11-12世紀という早くに始まった段階的な文法化の過程の結果である、ということである。信頼できる通時的な事実および歴史的・社会言語学的コンテキストに基づき、かつ、文法化理論の枠組みの中の通言語的一般化に依拠して、北ロシア語所有完了の文法化の段階的展開を提案したい。論点として取り上げるのは、文法化理論で最も議論されてきた問題つまり文法化進行の単方向性である。本論文では、ある具体的な基準つまり性・数の一致に関して、北ロシア語の所有完了の文法化が初期段階で単方向性仮説とどのように矛盾しているように見えるかを描く。しかし我々が更に示すことは、方向性のこの内的な「反転」にも拘わらず、所有完了構文が言語の中でひとたび確立し、所有から完了への文法過程 (possession-to-perfect grammaticalization path) に沿って進展しはじめると、文法化の単方向性理論の想定と合致した振舞いを見せることである[Kuteva, Heine 2004:37]。

著者たちは、所有完了構文について、入手可能な歴史的な情報と言語現象の地理的な分布、文法化理論の枠組みで得られた通言語的一般化に基づいて [以上 Ibid.:41] 仮説を提示しているのである。彼らは文法化の程度に従い、そのステージを4つ考え (Stage0からStage) [Ibid.:42-46]、その単方向性を予想するのだが、しかし、北ロシア語の示すものはその予想に反するようと思われるのである。ここで彼らが取る観点は、所有から完了への文法化は「そもそも内的な過程により引き起こされ、しかる後に西方諸語との接触により促進されたか、あるいは言語接触により惹起かつ促進された」 [Ibid.:56] というものであった。そして、この構文

の文法化の過程を彼らの提示するステージ毎に追跡する。所有構文が完了構文へと発展することに関して、理論的な予想 通言語的なもの、印欧語にもとからあり受け継がれているもの、ヨーロッパ諸語における言語接触によるものを挙げた上で、言語接触の役割を重んじるのである [以上 Ibid. :66-67]。本研究はシェーマ先行のきらいがややあるが、単方向性という文法化の重要概念をロシア語史に即して説明するものとなっている。

終わりに

以上、ロシアの学界での研究事例およびロシア語学プロパーの文法化研究の紹介を行った。それらの具体的な価値評価は後日を待ちたいが、代表例であることは間違いない。

前者の研究は類型論に属する。そもそも、ロシアの学界にあっては、ロシアという多民族国家の現状を反映してか、言語類型論が盛んであった。「西側の」文法化理論を援用しつつ、伝統を踏まえて、現在、類型論が盛り上がっているように思われる。今後、ロシアの学界がどのような寄与をなすか、興味深いところである⁸。

後者の研究のようにロシア語を文法化の題材とするのにも大きなメリットがある。以下の3点が指摘できよう。

・ロシア語には、過去から現在まで豊富な文献史料・方言資料があり、かつ、これらが研究者たちによって詳細かつアカデミックなレベルで、つまり信頼できる形で学会に報告されている。類型論的研究では取り扱う全ての言語に研究者自身が通じていることはあり得ない(もちろん、それが望ましいとしても)。従って、信頼できる報告に基づいて考察を行わざるを得ない。誤った情報では誤った考察に陥る(その危険性は常にある)。ロシア語学は確立した学問であり、研究者は、信頼に足る情報を比較的容易に得て、それに基づいて論を進めることができる。

⁸但し、類型論なり文法化なりを研究するためにロシア語を習得する必要がある、とはならないように思われる。もっとも、ロシア語を知ること、豊富な先行研究にアクセスが可能になることは確かである。

- ・ロシア語と他のスラヴ諸語との比較・対照が可能である。その他のスラヴ諸語の研究も信頼できるものである。
- ・ロシア語は、コーカサス諸語、フィン・ウゴール諸語、中央アジアやシベリアの諸語といった様々な言語と過去から言語接触を繰り返し、相互に影響しあっている。これは、文法化の進行を言語接触とともに考える素材を提供している。[Kuteva, Heine 2004] もそのような試みの一つであった。

歴史言語学者メイエによって導入されたことから既に明らかなように、文法化なる概念はロシア語史研究にもなじみのものであったが、それが現代の研究の進展により、さらに視角を与える説明原理となっている。ロシア語史も通言語的な現象という更に大きな枠組みの中で語史をとらえることが出来るだろう。なんと云っても史料は豊富なことから料理のしがいはいくらでもあるのだ。

同時に、現代ロシア語内のみで文法化を考えることにも益がある。[三宅 2005]は、「共時的研究において、文法化という視点を導入するということにも、十分な有効性があると認める」としたうえで、「同一の形式で、内容語〔自立語〕的な用法と機能語〔付属語〕的な用法を合わせ持つ場合、その用法間の連続性、及び有機的な関連性を捉えることが可能になる」と指摘し、「文法化により作られた機能語の抽象的な意味、あるいは文法機能を説明しようとする際に、文法化される前の内容語としての意味からの類推が可能になる」としている[以上 三宅 2005:67]。前述の [金水 2004] の通り、文法化に「意味論・語用論的な側面」もあった。とすれば、文法化には語学教育へ貢献することも可能となる。ある語なり構文なりの核となるイメージ、あるいは「発想法」が腑に落ちず習得がうまくいかなかったりすることはまま見られる。一方で今後ますます求められる発信型の文法もしくは教育文法(非母語話者向け文法)は、理解するだけでなく、自分の考えを構文にして発信できるようなものであるべきであった。そのために、当該言語・構文の「発想法」「動機づけ」「有機的な関連性」を学習者に説明する文法編纂が望まれている。このとき、文法化による説明は一助となろう。もちろん、個別言語の共時的な事象に、通言語的・通時的な説明を持ち込むの

は慎重になるべきであるが、教育文法の折衷的性格に鑑みれば学習に役立つものであれば取り入れるのに躊躇は不要である。

文献

大堀壽夫 「日本語の文法化研究にあたって 概観と理論的課題」 『日本語の研究』 第1巻第3号(2005年7月): 1-16頁。

金水敏 「日本語の敬語の歴史と文法化」 『言語』第33巻第4号(2004年4月): 34-41頁。

三宅知宏 「現代日本語における文法化 内容語と機能語の連続性をめぐって」 『日本語の研究』 第1巻第3号(2005年7月): 61-76頁。

Kuteva T., Heine B. On the possessive perfect in North Russian // Word. — 2004. — Vol.55. — No.1.(April). — pp.37-71.

Лопатин В.В. Грамматикализация// Русский язык: Энциклопедия.—М.: 1979.—С. 61.; Русский язык: Энциклопедия.— 2-е изд.—М.: 1997.—С. 96.

Майсак Т.А. Грамматикализация глаголов движения: Опыт типологии// Вопросы языкознания.—2000. — №1.—С.10-32.

Майсак Т.А. Типология грамматикализации конструкций с глаголами движения и глаголами позиции.—М.: Языки славянской культуры, 2006.

(こばやし きよし)

КОБАЯШИ, Kiyoshi: Grammmaticalization and Russian Studies.

本稿は、科学研究費補助金採択課題基盤研究(B) 17320082 (日本学術振興会)「日露新時代の社会的・言語的現状に対応したロシア語教育文法構築に関する総合的研究」の成果の一部でもあります。